

第1巻において「道」が用いられる場面 ②

前回は、「おさしづ」(改修版)第1巻の件数を整理して、「刻限」(教祖御話、御諭、御話含む)「本部事情」「本席及び家族」といった場面において「道」という言葉が頻繁に用いられていることを明らかにした。特に、「刻限」では単純な件数としても「個人身上」に次いで多く「道」という言葉が用いられている。また、本席飯降伊蔵の身上に関する伺いの「おさしづ」は、「概してお道全般に対する事柄が多く」「刻限御話に類似した内容をもつものもある」ということが指摘されている(金子圭助「“刻限御話”考(その二)一御話内容の分類」『天理教学研究』第13号、73頁)。したがって、「道」という言葉が用いられる場面を考える際に、「刻限」は重要なカギになる。今回は、「道」が用いられる「刻限」を取りあげ、どのような話題において説かれているのかを確認したい。

「刻限」の分類

上で引用した金子論文「“刻限御話”考(その二)一御話内容の分類」では、「刻限」について次のように説明している。

刻限御話は親神様の方から人間に

- ①旬々の勤め方をお教え下さる(現在)のであり、それには
- ②将来のことを予言される(未来)ことがあり、また
- ③人々の心の成人を促がし、その成人に応じて御仕込み下さるのである。それには「古い話」として過去の事柄から縷々とお説き下さることがある。(67～68頁)

このように「刻限」の「おさしづ」について定義した上で、おさしづ本(旧8巻本)に集録されている明治20年から40年の刻限の「おさしづ」すべてを項目をあげて分類している。ここでは、その分類に基づきながら、「道」が用いられる場面について考えることにしたい。

同論文の分類から、「改修版」の第1巻にあたる明治20年から23年の「おさしづ」の件数を集計して示すと以下のようになる。また、「道」という言葉が用いられる「刻限」の「おさしづ」がどのような内容をもっているかをみるために、「刻限」全体のうち「道」という言葉が3回以上用いられている「刻限」が何件あるかを()で併記する。ただし、1件の「おさしづ」に複数の話題が含まれることもしばしばあるため、必ずしも1件が1項目に分類されているわけではない。

- A 刻限：予言 39 (15)、心得 10 (2)
 B 心得：27 (12)
 C 本席様：本席になる予言 9 (1)、取扱 9 (2)
 D 教祖様：五年祭 2 (2)
 E さづげ※：さづげ(本席) 9 (2)、別席 5 (2)、取次 10 (2)
 F 教会：設置 9 (1)、移転 3 (1)
 G おびや許し：2 (0) (※原文では「お授」と表記される)

この分類において、「心得」というのが2カ所に出てくるが、Aの心得は「刻限についての心得」、Bの心得は「一般心得」として注記されている。この「刻限についての心得」は、刻限の「おさしづ」に対する心得と、時句としての刻限に対する心得の両方を含んでいる。その他、分かりにくいのは、Cの「本席様：取扱」であるが、飯降伊蔵本席に定まられて「おさしづ」

を下さることの意味およびそれに対する周囲の人々の受け取り方について説かれたものである。Eの「さづげ(本席)」は、さづげの理をわたすということ、「取次」は別席において親神の教えを取り次ぐこと、および、取り次ぐ人についてのことである。Fの教会の設置や移転は、一般教会ではなく、明治21年に東京で認可された教会本部の設置と、その教会本部を東京からおぢばへ引き移すことについて説かれたものである。

この分類によって、第1巻における「刻限」全体についてまとめると、上に引用した「刻限御話」の説明にあるように、「将来のことを予言される(未来)こと」、および、その刻限に対する「旬々の勤め方」について説かれたAの刻限が最も多く、49件である。次に多いのはBの一般心得の27件である。このAとBは一応区別がなされているものの、金子氏自身がその区別の難しさを明記しているように、重なる部分がかかなりある。それは、なにか目前にある具体的な事柄に対して、特定の行動を促すものというよりは、たとえば「所々国々、さあへ行き渡る。…十分手広い道もそろへ印を打ち掛ける」(明治20年3月20日午後7時)という「おさしづ」のように、お屋敷に寄りくる人々、中でもそこに住み込んでいたり、頻繁に通ってくる人々に対して、これからの生き方・通り方を諭されるものである。

その次に多いのは、Cの本席様とEのさづげである。これは、一方では本席と定まられること(C)、他方では本席としてさづげの理をわたされること(E)であって、一連のものであるとすることができる。そのあとに、Gをびや許し、F教会本部、D教祖5年祭という、より一層具体的な問題に対する「刻限」の「おさしづ」がある。

「刻限」の分類と「道」

それでは「道」が用いられている「刻限」はどうであろうか。これも、最も多いのはA刻限の予言15件と刻限についての心得2件、そして、Bの一般心得12件で、合計29件である。次に多いのが、C本席様3件とEさづげ6件で計9件、さらにD教祖様2件、F教会2件、Gおびや許し0件の計4件となる。

件数の順序としては、第1巻の「刻限」全体と「道」の用いられる「刻限」とは一致しており、この中では特に「道」が用いられる「刻限」に特有な傾向はないようにも見える。だが、各項目において「刻限」に「道」が含まれる割合を示すと、AB:39/76(38%) / CE:9/42(21%) / DFG:4/16(25%)となる。

第1巻の「刻限」全体のなかで、「道」が用いられている「刻限」は、AとBに集中していると言える。DFGは件数自体が少なく、割合の細かな数値にそれほど意味はないが、教祖5年祭関連の「おさしづ」では2件とも「道」が用いられている。特に5年祭のお打ち出しの明治22年11月7日の「刻限御話」では「ひながたの道」が強調され、第1巻では最多の用例であることは注目に値する。

今回の整理を踏まえて、次回に「おさしづ」本文を引用しながらその場面を考えることにしたい。